『部落解放研究』 広島部落解放研究所　27号　2020年　93 - 115頁

方法としての「朝鮮」
――森崎和江におけるインターセクショナリティ

松井　理恵

Ⅰ　問題の所在

本稿は、近年のフェミニズム研究において言及されるインターセクショナリティという概念を手がかりとして、森崎和江の作品を読み解くものである。

これまでも森崎の思想は、作品の基礎となる森崎自身の経験に着目して研究されてきた。「労働運動のオルタナティヴの模索」というテーマのもとに研究を進めてきた水溜真由美は、『サークル村』から大正闘争までの一連の運動が森崎の思想形成に決定的な影響を及ぼしたとし、『サークル村』、さらに同時代の炭鉱のサークル運動へと研究対象を広げ、森崎の思想のオリジナリティを明らかにした [水溜,2013]。これに対して本稿が焦点を当てるのは、森崎が植民地時代に朝鮮で過ごした経験と、この経験に基礎づけられる作品群である。森崎自身、「コレクション全５巻はこうした植民二世の原罪意識の歪みを、訂正したくて苦悩しつつ生きたわが足跡である」[森崎,2009b:341] と書いて全集を結ぶように、植民地支配下の朝鮮で生まれ育った経験は彼女の作品の核といえる。

ただし、森崎の朝鮮経験と彼女の思想の関連については、越境性に着目して考察した玄武岩の研究に譲り [玄,2018]、本稿ではインターセクショナリティという視角から森崎の思想を検討する。すなわち、植民地、労働、女性、ナショナリズム、生命、環境といった多様なテーマを取り上げてきた森崎が、社会的抑圧を捉える視座を明らかにする。さらに、その背景に朝鮮で過ごした経験の存在を示す。

山室信一は森崎との対談において「森崎さんには方法としての『朝鮮』があり、その対比で日本の原風土を人びとの生活のなかに突き止める文業による自己確認を経て、『おんな』や『いのち』が出てきたようにうかがいました」[森崎,2011:23] と、これまでの森崎の軌跡を総括する。山室が指摘する方法としての「朝鮮」について、この対談で深められることはなかった。本稿は、森崎の作品を読み解き、この、方法としての「朝鮮」の内実に迫りたい。

Ⅱ　先行研究――当事者の経験から立ち上がるインターセクショナリティ

過度の単純化を招くという批判を受けつつも、フェミニズムは第一波フェミニズム、第二波フェミニズムというように波に分けて理解されることが多い。現在のフェミニズムの位置づけ、たとえば第三波以降のフェミニズムと表現するのか、あるいは第四波フェミニズムと表現するのかについて論者によって見解が分かれるが、現在のフェミニズムにおいてインターセクショナリティという概念が重要な位置を占める点については共通する。

インターセクショナリティ（intersectionality）を日本語に直訳すると、交差性となる。インターセクショナリティとは「人々の経験がひとつの側面ではなく、人種やジェンダー、階級といった複数の相互作用しあう要素によって形作られており、そうした交差の結果として複雑な社会的抑圧が起こっている様相を意味する語」である [北村,2020:51]。藤高和輝はブラックフェミニズム理論、ポストコロニアル・フェミニズム理論、クィア理論、そしてトランスフェミニズム[1]の議論を取り上げ、インターセクショナル・フェミニズムの理論とその系譜を考察した [藤高,2020]。藤高によると、インターセクショナリティは「女性」を単一のカテゴリーとみなすことによって、人種やジェンダー、階級などの差異を抹消し、差別や抑圧の問題を「性差」に還元する「白人中産階級の異性愛女性」を中心とするフェミニズム運動に対する異議申し立てに端を発する。すなわち、有色人種の女性、第三世界の女性、セクシュアル・マイノリティたちなどが直面する社会的抑圧は既存のフェミニズムでは捉えられない、という当事者の問題意識から生まれた概念といえる。インターセクショナリティをめぐる議論は、ある人間に対して社会的抑圧を引き起こす原因を要素ごとに切り離して考えるのではなく、それらが交差するポイントにこそ社会的抑圧が存在することを理論化した。

このように、インターセクショナリティはフェミニズム運動において主張されてきた内部の差異から生まれたが、それは運動内部の分断を企図するものではない。そうではなく、異なる質の社会的抑圧を生きるフェミニストたちの連帯がこの概念には賭けられている。しかし、藤高も指摘するように、近年 Twitter を中心としたネット上では、トランスジェンダーを差別し、攻撃するフェミニストの言説が盛んに生産されている。フェミニズムを歴史的に検討すると、フェミニズムのなかにトランスーポジティヴな言説を認めるのは決して難しくなく、またフェミニズム運動とトランス・アクティヴィズムが歩みをともにしてきた歴史もある。にもかかわらず、フェミニズムからトランスジェンダーを排除する動きが激化しているのである。ここに、フェ

ミニズムが喫緊の課題としてインターセクショナリティから連帯を模索しなければならない状況がある[藤高,2020]。

ところで、インターセクショナリティが主題化しようとする問題について、これまで議論されてこなかったわけではない。上野千鶴子の「複合差別論」は、まさにインターセクショナリティに関する議論といえる[2)][上野,2015a]。上野は「複数の差別が、それを成り立たせる複数の文脈のなかでねじれたり、葛藤したり、ひとつの差別が他の差別を強化したり、補償したり、という複雑な関係」[上野,2015a:358]にあり、それを解き明かすために「複合差別」という概念を提起している。インターセクショナリティとは異なって、フェミニズム運動内部の動きからではなく、「すべての被差別者の連帯」は容易ではないという現実から問題を設定し、複合差別を類型化する。そして、例として階級・性別・民族・障害という社会的変数を挙げ、これらの因果関係を軸として複合差別に関する研究動向を整理する。ここで重要なのは、社会的変数として挙げられるカテゴリーは歴史的なものであり、その重要性も歴史的文脈に応じて変化するという指摘である[3)]。このように、分析的な議論を展開したうえで上野は「被差別者の解放思想が共通にもつのは、他者によって『生きられた経験』の多様性に対する承認と想像力である」[上野,2015a:393]と結論づける。

さて、日本におけるフェミニズムの先駆的な著作とされる『第三の性』をテキストとして森崎の女性論を分析した水溜は、次のように指摘する。「女たちの被抑圧状況は、男女の分断、『生んだ女』と『生まない女』との分断、また『からゆきさん』その他で展開される、売春婦と売春婦でない女との分断、日本の女と植民地の民衆との分断など、女たちの内部と外部に縦横に穿たれている溝を貫くような仕方で現象している（強調引用者）」[水溜,2000:111]。したがって、「女」という性差のみに社会的抑圧の原因を還元する運動は男女の分断を深め、さらに「女」の外部に存在する被抑圧者への抑圧につながるだけでなく、「女」の内部に存在するさまざまな差異を等閑視することによって、かえって「女」の内部の分断を深めてしまうと水溜は述べる。この分析からは、森崎の女性論が女たちの直面する社会的抑圧の背景に、女たちの分断を見据えているのがわかる。つまり、ここにはインターセクショナリティという概念を武器として格闘する現在のフェミニズム運動との共通点が指摘できる。一方で、森崎の女性論は女たちの内部だけではなく、外部の被抑圧者にも目を向けている。女たちの内部と外部を連続したものとして捉えることによって、女たちの解放思想をすべての被差別者の解放思想に向かわせようとするのである。つまり森崎の女性論は、近年のインターセクショナ

リティをめぐる議論と上野の「複合差別論」を接続する射程をもつ。

森崎の作品を上野の「複合差別論」で分析し、森崎が描いた複合差別を析出することは可能であろう。だが本稿は、そうではなく、当事者みずからが直面する複雑な社会的抑圧の論理化からインターセクショナリティという概念が生まれたように、森崎の作品から植民地支配下の朝鮮で生まれ育った経験、さらには敗戦後に植民二世の原罪と向き合ってきた経験を読み解くことから出発する。つまり、森崎の経験に焦点を当てることによって、みずからを内側から破壊するようにして探し求めた、彼女の社会的抑圧を捉える視座を模索したい。したがって、上野の「複合差別論」を適宜参照しつつも、インターセクショナリティの文脈に森崎の作品を位置づけることになる[4)]。さらに、森崎の作品をインターセクショナリティの視角から検討することは、インターセクショナリティから連帯を模索するというフェミニズムの喫緊の課題に対して、ヒントを与えうるのではないか。このような問題関心の下、本稿は森崎の作品をインターセクショナリティという文脈に位置づけて読み解く。

Ⅲ　森崎和江のあゆみと森崎作品に関する研究動向

森崎和江は1927年、当時日本の植民地支配下にあった朝鮮の大邱で生まれた。1944年、福岡県立女子専門学校を受験するために、家族と離れ単独で日本に渡る。そして1945年、福岡で敗戦を迎える。久留米に移った森崎は1949年に丸山豊が主催する詩誌『母音』を知り、翌年から同人として発表を始めた。1958年、生活と思索の場を筑豊に移す。中間に転居した森崎は、谷川雁・上野英信らと文化運動誌『サークル村』を創刊した。翌年には女性交流誌『無名通信』を創刊する。当時、石炭から石油へというエネルギー転換が国の政策として推進され、産炭地筑豊の労働と生活は炭鉱合理化の圧力にさらされていた。炭鉱合理化の進展と三池闘争の敗北を受け、1960年に『サークル村』は終刊した。文化運動から反合理化闘争へと運動が変質していくなかで、1961年には『無名通信』も廃刊となる。だが、森崎は谷川が去ったのちも筑豊にとどまり続け、『サークル村』から大正闘争に至る運動を総括する作品や、炭鉱労働者の精神史を探求する作品を発表した。そして、炭鉱離職者の状況に目を向けることによって、改めて筑豊という場を問い直した。また、1968年の韓国訪問を契機として、これまで背景として描かれてきた植民二世の、すなわち植民地朝鮮に生まれた原罪に焦点を当てた作品も

生み出されるようになる。そこで森崎は、「異族」との出逢いという観点から、植民地問題やナショナリズムを鋭く問うている[5)]。

このように筑豊で生み出された森崎の作品は、大学闘争、ベトナム反戦運動、公害反対運動、沖縄返還運動、三里塚闘争といった運動に関わる多くの若者に共感をもって読まれたようである。たとえば、上野は森崎の初期の作品、特に『第三の性：はるかなるエロス』について、次のように書く。「何かが言いたい、でもそれはこのことばでは言い表せない、そのもどかしさが、彼女のつまずくような文体にはあふれていた。そしてその状況は、同時代を「男性同志」たちのもとで生きた学生運動のなかの女性たちーわたしもそのひとりだったーと、どんなに似かよっていただろうか」[上野,2013:15]。また、作品を読んだ若者が中間に住む森崎を訪ねることもしばしばであった[森崎・中島,2011:149-150;185-191]。森崎の文章は、文字通り多くの若者を引きつけたのである。

1979年に中間から宗像へと居を移した森崎は、日本列島を歩き、そして韓国の人びととの交流を深めながら、さらに多くの作品を生み出した。1990年代以降の単著のタイトルに「いのち」という言葉がしばしば用いられるようになったことからもうかがえるように、生命や環境をテーマにした作品が目立つようになる。

2000年代後半以降には、森崎のこれまでの作品をまとめ、再評価する動きがみられるようになった。2008年から2009年にかけて全集『森崎和江コレクション 精神史の旅』全5巻が刊行された。続いて、中島岳志との対談を通じてこれまでの作品と半生をふり返る『日本断層論』[森崎・中島,2011]、未公刊作品を含むエッセイと詩、さらに全著作のブックガイドが掲載された『いのちの自然』[森崎,2014]が出版された。これに加え、森崎の作品自体も復刊されている。森崎によって発表された詩のすべてを収録した『森崎和江詩集』[森崎,2015]が出版され、『からゆきさん』[森崎,2016]、『第三の性』[森崎,2017]といった作品が復刊された。このような動きによって、森崎と同時代を生きた読者に加え、筑豊における森崎の思想的格闘を直接的には知らない次世代の読者にも、森崎の作品が開かれることになった[6)]。

連動するように、森崎に関する研究も2000年代以降、盛んになる。森崎の思想に焦点を当てた本格的な研究書として、2013年に刊行された水溜真由美『「サークル村」と森崎和江：交流と連帯のヴィジョン』が挙げられる。また、森崎和江のテキストに文学研究からアプローチするものとして、佐藤泉や茶園梨加の研究がある[佐藤,2009;2018][茶園,2013;2016;2018]。森崎のテキストを直接扱った研究ではないが、「からゆきさん」をめぐる言説と政

策の変遷を検討した嶽本新奈の研究は、森崎の『からゆきさん』を読み直す試みとも読める[嶽本,2015]。雑誌に特集として森崎が取り上げられることもあった。全集出版と関連して『環：歴史・環境・文明』では、2009年に刊行された38号で「『森崎和江』を読む」、2010年に刊行された43号で「いま、なぜ森崎和江か」という小特集が組まれている。2016年の『脈』91号では「森崎和江の歩み」という特集が、2018年の『現代詩手帖』61（9）では「森崎和江の詩と思想」という特集が組まれている。

Ⅳ　分析――植民二世の経験から敗戦後を生き直す軌跡が産む思想

1　『からゆきさん』から読み取るインターセクショナリティ

ここまで森崎のあゆみとその作品、さらに研究動向を概観したが、本稿は森崎が植民地支配下の朝鮮で生まれ育った経験、そして敗戦後の日本で生き直そうとした経験を読み解くために、『からゆきさん』と『慶州は母の呼び声：わが原郷』（以下、『慶州は母の呼び声』）という二つの作品に焦点を当てる。森崎は『慶州は母の呼び声』の序章に次のように書いている。「わたしは自分の植民地体験を客観しておきたくて、長い年月のあと、ようやく文章にしたのは、わたし自身のことではなく、わたしと対照的な人生と思えるからゆきさんのことであった。（中略）が、残影は消えないのだろう、ここに、重いペンを取り、同じように無名の、けれどもはるかに罪深い市井人の日々を記すことにする」[森崎,1984:9-10]。つまり、森崎においてこの二つの作品は敗戦後に向き合った「自分の植民地体験」に貫かれているといえる。それだけではない。森崎はこれらの作品でからゆきさん、あるいは森崎自身の女性という性を重要な軸のひとつとして描き、植民地支配下の朝鮮を生きた人びとの生が、単一の要素、たとえば民族や国家という枠組みのみで解明できるわけではないことを示した。

森崎の代表作である『からゆきさん』は1976年に刊行された。題名となっている「からゆきさん」とは、唐天竺、つまり海外に出稼ぎに行く者を指す九州の北西部のことばで、のちに明治維新前後に娼婦として働くために海を渡った女性を指すことばとして使われるようになる。膨大な森崎の著作のなかでも、おそらくもっとも読まれてきた作品であろう。水溜は『からゆきさん』を、『サークル村』から大正闘争に至る一連の運動を通じて、労働者、男女、そして民族といった集団間の分断と交流をテーマとして格闘してきた中間時

代の最後を飾るにふさわしい集大成的な仕事と位置づける [水溜,2013]。一方上野は、文章を読みつづけることにも困難を感じるような、漢字だらけの生硬な文章で、これまで誰も語ろうとしなかったことをことばにしようと苦闘してきた森崎が、初めて生理に届くことばを手に入れ、文体ががらりと変わったのが『からゆきさん』であるという [上野,2013]。なお、2002 年には韓国で翻訳出版されている [7)]。

森崎がからゆきさんに関する著作を発表し、単著として出版するのと前後して、1972 年に山崎朋子が『サンダカン八番娼館：底辺女性史序章』を刊行した [8)]。嶽本はからゆきさんをめぐる言説の変遷を検討したうえで、山崎の『サンダカン八番娼館』と『からゆきさん』を比較する。嶽本によると、エリート女性史へのアンチテーゼとなる底辺女性史の題材としてからゆきさんを見出した山崎にとって、「からゆきさんとは、『階級と性の二重の桎梏のもとに長く虐げられてきた』日本人女性の＜原点＞」[嶽本,2015:166] であり、そのような存在としてからゆきさんを描いた。一方、森崎は日本の膨張主義に利用され、その渦に巻き込まれたからゆきさんを、「単に抑圧された『被害者』に留まらない輻輳する『民族』やジェンダー間の軋轢の中に放り込まれた女性」[嶽本,2015:173] として描いた。まとめると、山崎が描くからゆきさんからは植民地主義が抜け落ちているのに対して、森崎は植民地主義を重要なテーマの一つとしてからゆきさんを描いていると嶽本は指摘する。

からゆきさんという存在をどのように捉えればよいのか。嶽本は広くからゆきさんをめぐる言説の変遷を検討したうえで、その答えを導き出す。本稿では、嶽本の「輻輳」ということばに着目しつつ、森崎がからゆきさんをどのように捉えたのかを理解するため、『からゆきさん』を上梓する前後に書かれたテキストを追ってみたい。森崎は書く。

> 私たちはからゆきさんに対応するとき、近代化自体への批判と対決をこめないかぎり、猟奇性の枠を越えない。なぜならば「からゆき」さんの存在は、日本の近代化のひずみそのものなのだから [9)]。
>
> [森崎,2009a:180]

「森崎のなかで、これらの多様な（1960 年代後半から 70 年代半ばにかけて取り組んだ、植民地支配、女性問題、炭鉱史、労働問題、天皇制、ナショナリズムといった：引用者）テーマは近代日本の問い直しという一貫した視座の下で分かち難く結びついている」[水溜,2013:4] と水溜が指摘するように、日本の近代化への批判と対決をこめて、森崎がからゆきさんと対峙している

のがわかる。では、森崎はからゆきさんの体験をどのように捉えようとしたのか。

> そこ（アジアへの心のひろがりと国家的侵略、アジア諸民族との接触と戦争、その接触の性のすがたといった実に多面な、思想のカオスのようなからゆきさんの体験：引用者）には性と階級と民族と国家とが、観念としてではなく、いたいけな少女への強姦のようにして煮つまり渦まき青白い炎をあげているのである。どれか一側面ばかりを受けとめようとしても、からゆきさんには無縁なこととなるだろう。
>
> [森崎,2009a:189]

ここには、からゆきさんの体験を観念から捉えるのではなく具体的に、そして性と階級と民族と国家といった複数の側面から記述する森崎の姿勢が表れている。換言するならば、インターセクショナリティと同様の発想がみられる。だが、嶽本が指摘するように、『からゆきさん』において植民地主義が重要なテーマであるがゆえに、差別と差別が交差する点というより、支配と被支配の関係が複雑に絡まる点に、からゆきさんの体験を位置づけている。すなわち、森崎の描くからゆきさんは、社会的抑圧を受ける被害の側面だけではなく、周囲に社会的抑圧を加える加害の側面をも引き受けているのである。

森崎はみずからが植民地支配下の朝鮮で生まれ育った日々について、「加害者・被害者の単純な対応図」に収まりきらないゆえの罪深さを訴える [森崎,1984]。そこで、次に森崎自身の植民地朝鮮という経験をたどり、森崎が性と階級と民族と国家という複数の側面からからゆきさんを受けとめ、日本の近代化を批判、そして対決し得た背景を明らかにする。

2　支配／被支配関係の可視化——植民地における朝鮮人少年のまなざし

『慶州は母の呼び声』は、植民地支配下の朝鮮で教員として朝鮮人学生の教育に携わる父と、その父を追って生家を出奔した母のあいだに長庶子女として生まれ、暮らした 17 年間について書かれた著作である [森崎,1984]。当時、森崎が暮らしたのは、植民者のために近代化された都市で、住み込みのお手伝いを自宅に置き、前近代的なものや肉体労働とは切り離された環境であった。旧習の地を捨て、恋愛結婚で結ばれた両親が築くデモクラティックな家庭で育った森崎であったが、自身が成長するにつれ、そして坂道を転がるような戦局の悪化とそれにともない植民地支配が強化されるにつれ、植民

地の現実を強く受けとめるようになる。一人の少女の成長を通じて、植民地支配下の朝鮮を描いた作品である。この作品において朝鮮人少年は、森崎がそれまで気づいてこなかった支配／被支配関係を可視化し、気づかせる役割を担っている。そこで、森崎と朝鮮人少年とのかかわりを描くエピソードを以下に概観する。

小学校に上がったばかりの森崎が下校する通学路でのエピソードがある。米と麦の区別がつかず、稲で麦笛をつくろうとする森崎に、木をけずって遊んでいる朝鮮人の男の子が「笛、鳴らんよ。麦でないからだめだよ」と声をかける。驚いた森崎はその場を走り去ったが、この一件が森崎にコンプレックスを抱かせることになる。米と麦の区別がつかない森崎に驚いた両親は、台所で米と麦を見せたり、植物図鑑を見せたり、庭の池を田んぼにして田植えの真似事をさせたりして米と麦の区別を理解させようとするが、森崎はどうしても理解できない。「米のこと麦のことをよく知っている朝鮮人の子どもたちがどこかでのぞいている気がする」[森崎,1984:71]のである。森崎は泣き出す。「わたしが米と麦の区別がつかなかったことの根は深く、それは何よりも植民地の日本人を語るかに思う」[森崎,1984:80]。すなわち、朝鮮人に肉体労働をさせ、近代的で安楽な暮らしを送っていた植民地の日本人の生き方が意味するところを、幼い森崎に突きつける出来事であった。そして、同時に森崎は「自分の生の地点がつかみがたい不安」[森崎,2008a:15]を抱く[10]。

次にあらわれるのは、森崎の、女性という性をからかう朝鮮人少年たちである。小学３年生になった森崎が朝鮮人の住宅地を貫く通学路を一人で歩いていると、朝鮮人の男の子たちがいっせいに口笛を吹き鳴らしたり、両手を使って奇妙なしぐさをしたりするようになった。彼らからの、よくわからない問いかけに答えようものならば、どっとはやされる。しかたなく廻り道をしても、朝鮮人の男の子はどこにでもいて、どの子も森崎を放っておいてくれない。「鳳山町小学校の頃に朝鮮人の男の子からからかわれたことのいみが、なんとなくわかる」[森崎,1984:144-145]ようになったのは、女学校に進学し、親元を離れて下宿生活を送るなかで、男女の性のありようについて知ってからであった。つまり、朝鮮人の少年たちは、日本人の少女である森崎に性的な言葉を一方的に浴びせ、性を連想させる手ぶりを見せ、その意味を理解できない様子を見て、あざけたのである。

一見、思春期に少年が少女をからかう、よくある場面のようだが、そうではない。森崎はのちにこれらの経験を、特に少年のまなざしに焦点を当てて次のように表現した。

朝鮮人の少年の目。それはいつもわたしの性へ挑戦した。あたかも性に対する侮蔑が彼の総体の回復ででもあるかのように、全身でわたしの性の自在さをおしまげんとした。
くぼむことのない性意識を持つことにふだんの緊張が必要だった[11)]。

[森崎,1970:118]

さらに森崎は、広く朝鮮人男性との無言のかかわりについても次のように表現している。

(植民地の日系二世を：引用者) 意識して育てるということは、個体と個体との直接的接触だけに限らない。(中略)不特定多数の朝鮮人民衆は、ひとときも植民地生まれの女の子を、彼らがつくりあげた無言の対内地人対策の視線から自由にさせなかった。
(中略) 例としていささか不似合でもあるけれども、またどこやら似ているものを日常性の中に探すなら、輪姦をもくろむ若ものの無言の集団のなかを、女の子が歩いている図を考えてほしい。私は17歳まで、朝鮮人の幼児から老人にいたるまでのまなざしに集団姦を感じなかったことは一度もない。それらは性交をめざすなどという快感に端を発し、快感の消化に終わるたぐいの視線ではない。姦(おか)し殺すのである。もはや姦すはうすれ、一瞥で殺す、つまり勝負のまなざしで私の性を突かんとする。私は女をかくすことなく、その目をみつめかえし、女性を生きることでそれに堪えんとしてきた。生ま身の私を保護する女大学は植民地にはなかったのである。彼ら民衆はそのようにして私を育てた。これは一つの例にすぎぬ[12)]。

[森崎,2008a:80]

朝鮮人男性が森崎に向ける視線は、森崎の存在の根幹を狙い撃つようなものであった。それは、森崎が日本人であり、かつ女性であるがゆえに向けられたものであり、森崎自身にもそれを強く意識させた[13)]。1968年、亡父の代わりに訪韓した森崎は、亡父の教え子たちと再会した際に、この、まなざしについて語っている。

亡父の教え子である男性は、森崎に次のように問いかける。「どうお考えですか。精神の形成期に使ってきたことばから、人間は完全に抜けられると思われますか？一生の間にふたつのことばを国語とし得るものなのでしょうか」[14)] [森崎,2009b:23-24]。これに対して森崎は、みずからの引き裂かれた

言語感覚について触れ、そこからことばと思想を生み出す可能性を模索していること伝える。しかし、男性はそれを支配民族の言い分として切り捨て、みずからが日本による植民地支配下で成長したことに拘泥し、改めて森崎を問いつめる。だが、「人間の存在は一面的なものではない」と告げた森崎は、朝鮮民族の男性のまなざしから受け取った性の侮蔑をほのめかす。

「わたし、あの目に抵抗しつづけている間に自分が創られたのだと思います。存在とはそういうものだと思いますわ。
あなたは正攻法ではないものは、みな棄ててしまいたいとお考えのようですけれども、わたしはにほんでにほんの民衆のなかに正攻法に転化しうるものを探し歩いているのです。そこが発想の基盤になるのではありませんか？そういう質のある場所が。
支配と被支配の内部関係は固定的なものではないと思っています。ひっくり返しひっくり返しして関係がねじれこんでいます。ただ被支配者がそれが固定的なものだと思いこませるのが支配の技術でしょうけど」

[森崎,2009b:31]

一連の対話は痛々しいほど緊張に満ちている。男性の日本語をめぐる問いかけに対して、なぜ森崎は朝鮮人男性から受けた性の侮蔑を持ち出したのか。植民地支配下に日本語での思考を強制され、解放後も日本語、そして日本に囚われつづける朝鮮の若者に対して、森崎が冷淡であったわけではない。たとえば、森崎は敗戦後の日本で交わした父との会話を次のように書いている。

「あの生徒たちは、ひとりでものを思っている時も日本語を使っているだろう」
わたしは大声をあげて泣き出した。父が目がしらをおさえた。わたしの泣き声はなかなかおさまらなかった。
「もう、よし」
父が叱った。

[森崎,1984:215]

佐藤はこのテーマについて、森崎と、日本の植民地支配下の朝鮮に生まれ育った詩人、金時鐘の経験を、鋳型の裏表の関係に位置づけて論じている。日本の物語を朝鮮で培ったイメージを媒介としなければ理解できない森崎と、朝鮮に身を置きつつも日本の物語によって朝鮮の風土から引き剥がされ

た金時鐘は、それぞれの立場から「日本語」に対して問いを差し向ける。佐藤が指摘するように、森崎と金が模索するのが「自己ではないものへと関係している感覚、集約されない複数のものの協働」[佐藤,2009:92] であるならば、亡父の教え子に対する森崎のいらだちは、解放後の韓国を生き直す苦悩を、日本と朝鮮という植民地支配／被支配関係のみに還元して理解し、朝鮮民族として完全な存在であろうとする彼の姿勢に端を発するのではないか。つまり、朝鮮民族という確固たる立ち位置から、植民地支配下に形成されたみずからのアイデンティティの中にある日本的なものを不純で排除すべきものとし、その苦悩を訴える彼に対して、森崎は日本人というカテゴリーだけでは説明しようのない、みずからの植民地朝鮮経験を突きつけたのである。みずからにしっかりと刻まれた朝鮮人少年のまなざしとともに敗戦後の日本を生きつづける森崎は、一面的には捉えがたい、より端的に表現するならば、一側面からのみアプローチすることによって捉えられなくなる支配／被支配関係にこそ目を向けなければならないと、彼に伝えたのである。

この、朝鮮人少年のまなざしに関するエピソードは『からゆきさん』に登場するおキミという女性を思い起こさせる。おキミは16歳で李慶春という朝鮮人に売られて朝鮮に渡り、からゆきとなった。李は鉄道敷設工事で働く工夫たちを相手に娼楼を営んでおり、おキミがその娼楼で働いていたときのことである。日中、日本人の監督に使われていた朝鮮人工夫が4、5人で朝までおキミを買いきって、失禁するまで座を立たせず、失禁するおキミの様子をあざ笑う。つまり、彼らはおキミを辱めて日本人への憎悪を晴らそうとするのである [森崎,1976]。日本人の監督に使われていた朝鮮人工夫たちは被支配者の立場にある。そして、日本人の女を金で買って支配者となり、憎しみをぶつける。先述したように、森崎はからゆきさんを日本の近代化のひずみそのものであり、一側面からは受けとめられないと書いているが、植民地と性がからみ合うこのエピソードからは、まさに植民地という支配／被支配関係だけでは、そして男女の支配／被支配関係だけでは解きほぐせない近代化のひずみが看取できる。複合差別を論じるなかで上野は、生まれつき骨がもろく折れやすい身体をもつ女性として生まれた安積遊歩の半生記を手がかりとして「障害者差別と性差別は異なった原理で組み立てられており、一方の解放が自動的に他方の解放につながるわけではない」[上野,2015a:372] と指摘する。植民地と性という、異なる原理によって作動する社会的抑圧を受ける朝鮮人工夫たちとおキミの直接的な接触は、出口を完全に失っている。

森崎が受け止めざるを得なかった朝鮮人男性のまなざしの延長線上に、おキミは生きていたのではないか。幼少の頃から森崎をとらえて離さなかった

朝鮮人男性のまなざしは、のちに、民族、階級、性などの要素が相互作用するなかで支配／被支配関係が具体的にあらわれ、複雑な社会的抑圧が生じるという問題の把握、すなわちインターセクショナリティへと森崎の思想を進ませたと考えられる。

3　敗戦後の日本で生き直す

次に、森崎の敗戦後の生き方と、それを規定する植民二世の原罪について論を進めたい。ここでは森崎が初めて発表した『まっくら：女坑夫からの聞き書き』[森崎,1961] を取り上げる。『まっくら』は全 10 章からなるが、それぞれの章は元女坑夫の体験談の語りが再現された聞き書きの部分に森崎のエッセイが添えられるというかたちで構成されている。水溜は坑内労働について雄弁に語られる聞き書きの部分と、元女坑夫が深い喪失感にとらわれ言葉を失っている様子が描かれるエッセイの部分の落差に着目して、次のように指摘する。すなわち、女性の坑内労働からの離脱を解放と捉える感覚が支配的となり、元女坑夫の物語を肯定的に受けとめる基盤そのものが消滅してしまった状況において、森崎は元女坑夫にこそ女性の解放された姿があるとする価値転換をなし得たのであり、それが『まっくら』という作品を成立させたのである [水溜,2018]。同じような価値転換をなし得た著作として、第二次世界大戦で従軍した女性への聞き取りからなるスヴェトラーナ・アレクシェーヴィチの『戦争は女の顔をしていない』[Alexievich,1984=2016] を思いうかべずにはいられない。ただ、これまで闇に埋もれてきた女性たちの声を世に伝えようとするアレクシェーヴィチに対して、森崎の主眼はそこにはないように感じられる。

このことについて考えるには、森崎の「聞き書き」という方法について検討する必要がある[15]。森崎との対談において、山室は「聞き書き」といっても、「聞く」ことと「書く」ことの間にはかなり距離があるのではないか、と問題提起をする。

山室　相手方の話し言葉が文章になるとき、本当にそういうふうに語ったのかな、書き手による処理がうますぎるのではないかと訝しく思うときがありますが、文字化するとき、相手の息遣いや真意を伝えるのに苦労されますか。

森崎　意識したことはありません。お会いした時のイメージが湧いてくるのです。でもすぐに原稿にせずに、しばらく寝かせておくのです。

そうすると間違いに気づいたりします。あの時の感動はこんなうすっぺらではなかったでしょうと自分に言い聞かせるのです。

山室　「聞く」人も実は相手から見られているのですね。その場合に相手との距離感がなくなると、聞いたことをそのまま書くか自分の言葉に変えてしまうことになりますが、その表現方法についてはどのような葛藤があるのでしょうか。

森崎　自分の表現をしたいなどとは思わないです。自分を変えたくて書こうとしているのですから。（後略）

[森崎,2011:17-18]

おそらく山室はマイノリティを代表＝表象することの権力性について森崎の見解を引き出そうとしているのだが、みずからの聞き書きがマイノリティを代表＝表象する営みであるとは考えていない森崎と対話がどこかかみ合っていない。そして、森崎はマイノリティを代表＝表象するためではなく、自分を変えるために書くと断言するのである。

たしかに、『まっくら』の聞き書きに添えられたエッセイのことばの鋭さからは、森崎が元女坑夫のために書いているのではなく、自分を変えるために書く様子がうかがえる。「セナの神さま」と題された聞き書きに添えられた森崎のことばを次に示す。

話のはしばしにもみられますが、このおばあさんには家父長権の再生産による自由さがあります。（中略）ふつうに後山たちの持っている攻撃的な明るさは、家父長的な圧力もふくめて、一切の権力への反撥からうまれでてくるのです。このおばあさんにも性的疎外に対する敏感な対抗意識はあります。けれどもそれが権力のすりかえへむけられているところに、このおばあさんの閉鎖性があるようです。私がいましたのは数時間のあいだでしたが、息づまるような権力維持が、後山をしていたこの婦人の視界をやせさせているのを感じさせました。

[森崎,1961:134]

この文章からは、話をしてくれた元女坑夫の生き方に対して、森崎が批判的検討を加えているのがわかる。ただし、森崎は元女坑夫その人を批判しようとしているのではない。森崎の目線は元女坑夫を超え、彼女の生きてきた日本社会、そして森崎自身に向けられている。そこには元女坑夫に寄りそうというより、元女坑夫と緊張感をもって対峙して、みずからが歩むべき道を

切り拓こうとする森崎がいる。山室の問いに対して森崎が答えた「自分を変えるために書く」とは、このような営みであった。

森崎が自分を変えるために書かなければならなかった背景には、植民二世として朝鮮で生まれ育った経験、すなわち原罪がある[16]。ここでは、朝鮮とのかかわりについて書かれた森崎の著作のなかでも、敗戦後の生き方に関する記述に焦点を当て、植民二世の生き直す道が日本探しへとつながっていくことを確認する[17]。

次に引用するのは、森崎が進学のために朝鮮を後にして以来、約四半世紀ぶりに訪韓する前日に書いたとされる文章である。

> 私は敗戦後 20 年、自分自身の感覚的欲求の百八十度転換をはかるような痛みをもちながら、この親愛わきがたいにほんの、ははたちの実感をさがし歩いた。にほんの女の世界はほんとうにずぶずぶしていて、かんと打ちかえす個体のかたさをもっていなかった。とはいえ、私はこのくにの固有性について知る必要があった。それは私自身をあばくために、である[18]。
>
> [森崎,2008a:86]

敗戦後、満身創痍の森崎が手さぐりで日本を模索し、植民地生まれのみずからが何者であるのか暴こうとする様子が、感覚的に表現された文章である。次に、それからおよそ 15 年後、1984 年に発表された『慶州は母の呼び声』の余章の一部を示す。これまでも森崎は、みずからが生きた朝鮮の日々を断片的に作品に描いてきたが、これは一つの作品としてまとめた際の文章である。

> 敗戦以来ずっと、いつの日かは（韓国を：引用者）訪問するにふさわしい日本人になっていたいと、そのことのために生きた。どうころんでも他民族を食い物にしてしまう弱肉強食の日本社会の体質がわたしにも流れていると感じられた。わたしはそのような日本ではない日本が欲しかった。そうではない日本人になりたかったし、その核を自分の中に見つけたかった。また他人の中に感じとりたかった[19]。
>
> [森崎,1984:206]

ここからは、みずからを暴くだけでなく、生き直すために日本を模索する森崎の様子がうかがえる。すなわち、植民二世として朝鮮に生まれた原罪と

対峙する森崎は、敗戦後の日本で、みずからのなかにある「日本社会の体質」を否定し、それに代わる日本を探し求めることによって、生き直そうとしたのである。そして、森崎がそのよすがとしたのが、筑豊の炭鉱労働者、なかでも元女坑夫であった。のちに、森崎は炭鉱で働く人びとを「もっとも日本人らしい日本人、つまり私が探していたところの他人を侵すことなく、自らの力で食べ、同僚にやさしく飾りけなく生きる人びと」[森崎,2008b:77-78]と表現している[20]。

改めて『まっくら』の「はじめに」を読む。

> 私が坑内労働を経験した老女を探しあるきましたのは、日本の土のうえで奇型な虫のように生きている自分を、最後的に焼くものがほしかったためでした。が老女たちは唾といっしょに薄羽かげろうをはじきとばして、ずしりと坐りました。そこには階級と民族と女とが、はじめて虹のようにひらいていると私には思えました。いびつなその裂け目へ、私は入っていきました。
>
> [森崎,1961:4]

ここで重要なのは、植民二世である森崎が生き直すために、階級と民族と女という複数の側面から元女坑夫が語る経験を捉えようとした点である。つまり、異なる原理をもつ複数の支配／被支配関係に着目しつつ、日本の近代を生きてきた人びとの経験を検討することを通じて、森崎は自分を変えようとしたのである。ではなぜ、複数の支配／被支配関係への着目が森崎の生き直しに必要だったのだろうか。

この問いを解きあかすために、インターセクショナリティの議論にふたたび立ち戻りたい。先述したように藤高は、さまざまな社会的抑圧を生きるさまざまな当事者が生んだインターセクショナリティという概念に、分断ではなく連帯の可能性を見出すが、その際、シスジェンダー[21]のレズビアンであり、有色人種の女性としてトランスフェミニズムに応答するサラ・アーメッドの論考に手がかりを求めている[藤高,2020]。アーメッドは、規範や制度による暴力を「ハンマー」と位置づける。重要なのは、この「『ハンマー』はそれによって打ちのめされる人にはありありと経験されるものだが、それに『気づかないでいられる』人たちにとってはその存在さえ感知されない」[藤高,2020:45]点である。ここで、他者を打ちのめす「ハンマー」の存在を感知せずに済むのは、ある側面において社会的抑圧を受けない者の特権である。だがアーメッドは、異なる原理によって作動する「ハンマー」のあいだ

の「類縁性」を見出し、他者の痛みを想像して、他者とつながる道具として「ハンマー」を位置づけなおす。そして、ここからインターセクショナリティにもとづく連帯のヴィジョンを描いている。

植民地朝鮮で過ごした日々を描いた『慶州は母の呼び声』には、周囲の人びと、特に朝鮮の人びとが「ハンマー」で打ちのめされていたにもかかわらず、自分は植民二世という特権的な位置にいたため気づかないでいられたエピソードがしばしば描かれている。

> わたしは遥かな昔から、この世は日本人と朝鮮人とがまじりあって住んでいたのだと思っていた。（中略）自分が暮らしている大地が、ほんとうは朝鮮人のもので、血を流しているのだとは考えもしなかった。
>
> [森崎,1984:21]

> わたしたちの生活が、そのまま侵略なのであった。朝鮮にいた時は万歳事件（1919年3月1日に起きた三一独立運動:引用者）も知らなかった。友人たちの中にそれを知っていた人がいたろうか。
>
> [森崎,1984:38]

みずからが、大地を奪われた朝鮮人を打ちのめす「ハンマー」にも気がつかず、国を奪われた朝鮮人を打ちのめす「ハンマー」にも気づかない特権的な位置にいたことを、森崎はこの作品の中でみつめている。次に挙げる朝鮮人の級友の創氏改名に関するエピソードは、植民地支配／被支配関係に加えて、日本の家制度もかかわっているため、複雑な様相を示す。長くなるが、引用する。

> その（朝鮮人の：引用者）クラスメートも、創氏改名をした。わたしたちは、それ以前から彼女の出身がさしさわりになるような感情はまるで持っていなかったので、陽射しによって水流の温度がかわるような自然な感じで、彼女の改姓に接した。それはわたしの民族意識の欠落の故にちがいないが、それに加えて、わたしが女であったことが大きく影響しているように思う。
>
> 日本の女にとって、姓名は不変のものではない。それは衣服のように、時と場合によって脱ぎ着する仮の呼称であった。不変の自称は心にあるばかりといっていいほどの、姓名意識が、その婚姻制度とともに身についていたから、彼女の創氏改名を、みずから選んだ氏名として、いい姓

だね、すてきねえ、とわたしたちはとりかこんで讃えうらやましがったのだ。ほんとうに優雅な姓名であったから。京都ふうな……。
その頃わたしは朝鮮人の姓名が、家に付くものではなく、個人に付いていて、女といえども結婚によって姓名がかわることなどないのだ、ということを知らなかった。（中略）が、ともあれ、そのように姓名は、民族としても、また個人にとっても不変のものであったのだ。それが閣議の決定によって改姓を強行させられた。もちろん朝鮮人の意見など全く問われることなく。

[森崎,1984:155-156]

そもそも特権的な位置にいたため、みずからの姓名を失う朝鮮人の級友の痛みに気づかないのに加え、不変の呼称を生きられない日本の女であるがゆえに、森崎たちは級友の創氏改名を肯定的なものとして捉えてしまう。つまり、森崎たちは日本の家制度から抑圧を受ける立場から創氏改名した級友に共感を寄せるのであるが、それは植民地における支配／被支配関係を覆い隠すものでもあった。朝鮮人の級友に打ち下ろされた創氏改名の「ハンマー」は、そして彼女の痛みは、森崎たちには気づかれないままである。

これまでも言及してきたが、森崎はしばしば植民地朝鮮に生まれ育ったことを原罪と表現する。『慶州は母の呼び声』に記された一連のエピソードは、幼かったから気づかなかった、無知だったから気づかなかったという弁明ではない。そうではなく、「ハンマー」の存在すら気づかない特権的な位置に植民二世が生きたことを示す。周囲の人びとを打ちのめす「ハンマー」の存在に気づかない特権的な位置にいたことは揺るぎない事実であり、幼かったから、あるいは無知だったからといって、許されるわけではない。ゆえに、森崎は原罪と向き合うのである。ただし、森崎を特権的な位置に押し上げたのは、彼女の日本人という属性だけではない。そこには労働の問題も、階級の問題も、性の問題も関わってくる。たとえば、先述したように植民地で肉体労働と切り離されて生きてきた森崎は、肉体労働する者はすべて朝鮮人と認識していた。のちに、「わたしは日本に引揚げて来たとき、汗に汚れて働いている人びとが、みな日本人だと聞かされひどいショックを受けていたのだ。一度にわが身の罪深さが照らし出された」[22] [森崎,2008b:45] と記すが、ここでは植民地の支配／被支配関係だけでなく、植民地で培ったみずからの労働観をも問題視している。このように、加害／被害の単純な図式から出発するのではなく、植民地朝鮮における自分の特権的な位置の再検討から出発するがゆえに、森崎の思想はインターセクショナリティへと到達するのである。

ここで重要なのは、植民二世の特権的な位置を、つまり植民地朝鮮でのみずからを改めて知ることが、敗戦後の日本で生き直しにつながっていく点である。森崎の敗戦後の生き直しの旅は、まるでそれまで気づかなかった「ハンマー」で打たれる痛みを求めてさまよい歩くかのごとく続いていく。痛みだけではない。「ハンマー」によって打ちのめされる人びとの痛みをわがものとすることによって、みずからを「ハンマー」で変形させ、生き直そうとするのである[23)]。

森崎は1968年に書いた「わたしのかお」という文章で、みずからのアイデンティティについて、鋳型という表現を使って説明している。みずからを作り出したのは朝鮮という鋳型であり、森崎の朝鮮への思いは、自分の鋳型になったものの実体への恋しさに似るという[森崎,2008a]。このような比喩表現をふまえると、朝鮮によって鋳造されたみずからを鍛造、すなわち「ハンマー」で打ち、鍛える森崎のイメージが浮かび上がる。なお、鍛造された金属は鋳造されたものよりも強度がある。日本の近代を生きてきた人びと、特に植民二世である自分が通り過ぎてきた「ハンマー」に打たれ、その痛みを知る人びとに接し、敗戦後の日本で生きる道を探る森崎の営為は、みずからの存在を賭けて日本の近代を捉え直す試みといえる。

V　結語——方法としての「朝鮮」から導かれた「異質さの発見と承認」

本稿は『からゆきさん』をめぐるテキストから、森崎の作品におけるインターセクショナリティを指摘した。そのうえで、『慶州は母の呼び声』を中心としたテキストから、日本による植民地支配下の朝鮮で朝鮮人男性のまなざしと鋭く対峙しながら成長した経験を、さらに敗戦後の日本で近代化を生きてきた人びととのかかわりを通じて植民二世の自身を変えようとしてきた経験を読み解いた。そして、これらの経験が森崎の作品にみられるインターセクショナリティに結実したと論じた。

インターセクショナリティからの連帯が模索される今日、植民二世として日本の近代化と対決してきた森崎の作品から、どのようなサジェスチョンが導き出せるだろうか。インターセクショナリティとは、これまで気づかなかった他者を知る契機であると同時に、その他者の痛みに気づいてこなかったみずからを知る契機でもあることが森崎の作品から読みとれる。ここに、インターセクショナリティからの連帯を考えるうえで、重要なポイントがある。

インターセクショナリティをめぐる議論において、分断と連帯は表裏一体

である。インターセクショナリティの主張が、運動に関わる人びとのアイデンティティを細分化したうえで固定するならば、結果として運動は分断される。したがって、差異を認めつつも連帯するためには、森崎の作品に認められるように、インターセクショナリティが引き起こすアイデンティティの不安定さやゆらぎを戦略的に、社会的抑圧へと向けなければならない。それは、固定されたアイデンティティからは存在すら見えない社会的抑圧へと人びとをさし向ける。このような試みは、異質な他者に開かれた、インターセクショナリティにもとづく連帯の強靭さへとつながるであろう。

森崎は『慶州は母の呼び声』のあとがきで、異質さを発見し、承認する生き方を朝鮮人の女性たちによって養われたという [森崎,1984]。一方で、本稿で明らかにしたように、異なる原理によって作動する支配／被支配関係が錯綜する植民地朝鮮で育ち、その錯綜を引き受けながら敗戦後の日本を生き直した森崎の軌跡もまた、異質さの発見と承認へとつながっているように思われる。ここにこそ、森崎における方法としての「朝鮮」が見出せるのではないか。

注

1) トランスフェミニズムの「トランス」はトランスジェンダーを指す。

2)「複合差別」という概念は、英語圏のジェンダー研究から登場した intersectionality という概念に先行すると上野自身が述べている [上野,2015b]。藤高もインターセクショナリティを「様々な差別の複層性・交差性」[藤高,2020:34-35] と定義しており、複合差別とインターセクショナリティは重なる部分が非常に大きい。なお、上野の「複合差別論」の初出は 1995 年に岩波書店から刊行された『岩波講座現代社会学 15 差別と共生の社会学』である。

3) アメリカの 21 世紀初頭における同性婚運動の興隆と同性婚合法化の進展という現象を、アメリカの社会体制のあり方、特に新自由主義という文脈に位置づけ、同性婚運動をめぐる言説を読み解く兼子歩の論考は、複合差別の事例研究として位置づけられる。兼子は、結婚という制度が社会秩序を形成し統治を支える性格を有するゆえに、同性愛者と異性愛者のあいだの不平等を是正する同性婚運動が、新自由主義エリート以外の人びとを排除する可能性を指摘する [兼子,2014]。

4) ただし、上野も当事者のアイデンティティについて言及している。上野は複数の差別のあいだの関係の類型のひとつとして、「社会的弱者集団に属する個人のアイデンティティ複合内部の関係（葛藤）」[上野,2015a:378] を挙げ、「自己評価をめぐる優位と劣位とがせめぎあい、逆転しあう、自己を場とした権力ゲーム」[上野,2015a:380] と説明する。

5) 以上は森崎による自撰年表 [森崎,2009b] と水溜 [2013] を参照した。

6) WAN（Women' s action network）webページのミニコミ図書館では『無名通信』1号から20号までの電子データにアクセスできる。

7) 森崎和江著・蔡京希訳,2002『鎖の海（쇠사슬의 바다）』である。

8) 水溜によると、森崎は1969年に出版された谷川健一ほか編『ドキュメント日本人 5 棄民』に「あるからゆきさんの生涯」を発表しており、これはのちに『からゆきさん』に収録された[水溜,2013]。

9) 全集から引用したこの文章の初出は森崎和江,1974「からゆきさんが抱いた世界」『現代の眼』15 (6) である。全集の後記を確認すると、この文章は1995年に社会評論社から出版された『コメンタール戦後50年③』から収録したようであるが、水溜[2013]と嶽本[2015]、そして森崎[2009b]の著作一覧を確認する限り、1974年の文章とみるべきであろう。

10)「ひそかな田植え」から引用した。初出は1975年に刊行された『講座 農を生きる 5』月報である。

11) 水溜は、森崎による日本の伝統的共同体の体質批判を検討するなかでこの文章を引き、森崎が「朝鮮人の少年の目」を日本人男性の「まなざし」と対照的なものとして位置づけていること、そして「『第三の性：はるかなるエロス』三一書房、1965年では、森崎は性愛が『自他の合一』ではなく、異質な者同士の関係性であることを強調しているが、性愛に対する森崎のこうした感性の基礎に、幼少期における朝鮮人男性との関わりを認めることは困難ではない」[水溜,2013:377]と指摘している。

12) ここで一部引用した「わたしのかお」の初出は1968年7月『アジア女性交流史研究』3号である。この文章の一部は、『慶州は母の呼び声』の序章にも引かれている。

13) もちろん、森崎に女性という性を意識させたのは、朝鮮人男性だけではない。戦局が悪化し、森崎自身の生活にも戦争の影響が色濃くなる頃には、兵士になれない役立たずとして女性がのけ者にされる感覚を抱くようになる[森崎,1984]。

14) 一連の対話は「訪韓スケッチによせて」から引用した。この文章の初出は1970年『辺境』1号である。

15) 森崎の「聞き書き」については、現代詩手帖の特集における佐藤と水溜の論考が参考になる[佐藤,2018;水溜,2018]。

16) 植民二世という自称については、拙稿[松井,2018]を参照のこと。

17)「この（敗戦後の日本：引用者）現実のなかから、自分自身と日本というくにとを私は生まなければなりません。それがばらばらに生みだされることを私は望みませんでした。おそらく、あの当時の青年期の人びとは誰もそう思いつづけたことでしょう」[森崎,2008:43]。なお、初出は1980年『私の本の読み方・話し方』に発表された「書物ばなれ」である。

18) 1968年に書かれた「わたしのかお」からの引用である。

19) 1968年に発表された文章では「にほん」と表記されているが、1984年に発表された文章では「日本」となっている。この表記について、森崎は次のように説明している。「日本に来た

ときにもう、ほんとに絶望したんですよ、私。この日本で生きなきゃならないのかと。みんななんかはっきりしないんですよ。小さな小集団というか、固まって暮らしていて、ちょっと異質な人間が来たら排除するのね。どうして同質で固まっていなきゃいけないの？私、『日本』っていう字が書けなかったんですよ。自分は『日本人』っていうふうに言えないのね。だからひらがなで『にほん』って書く。いつもそうしてました、かなり長い間」[森崎・中島,2011:69]。

20)「子連れの旅立ち」という文章から引用した。初出は1981年『マダム』となっている。

21) シスジェンダーとはトランスジェンダーの対義語で、生まれたときに割り当てられた身体的な性別と自分の性自認（自分の性をどのように認識しているのか）が一致している人を指す。

22)「わたしのふろ」という文章からの引用である。1982年に東京書籍から刊行された『湯かげんいかが』が初出と思われる。

23) 姜信子は、執拗ともいえるほどに繰り返し植民地朝鮮の日々を書きつづける森崎を、「何度も何度もかさぶたを剥がして繰り返し自分を産みなおそうと、生まれなおそうとしている」と表現する [姜,2008]。

文献

Alexievich, Svetlana, 1984, *War's Unwomanly Face,*（三浦みどり訳 ,2016『戦争は女の顔をしていない』岩波書店 .）

茶園梨加 , 2013,「森崎和江作品にみる聞き書きと詩:『まっくら』と『狐』の関連から」『社会文学』37:152-167 頁 .

————, 2016,「森崎和江『第三の性：はるかなるエロス』にみる対話の可能性：交換ノートという形式」『脈』91:60-67 頁 .

————, 2018,「『産』の思想を考える」『現代詩手帖』61（9）:97-101 頁 .

藤高和輝,2020,「インターセクショナル・フェミニズムから／へ」『現代思想』48(4) 青土社:34-47 頁 .

玄武岩 , 2018,「森崎和江の＜原罪を葬る旅＞：植民者二世がたどるアジア・女性・交流の歴史」『同時代史研究』11:3-21 頁 .

兼子歩 , 2014,「アメリカにおける同性婚運動とグローバル化時代の新自由主義」三宅芳夫・菊池啓介編『近代世界システムと新自由主義グローバリズム：資本主義は持続可能か？』作品社 :166-185 頁 .

北村紗衣 , 2020,「波を読む:第四波フェミニズムと大衆文化」『現代思想』48 (4) 青土社 :48-56 頁 .

姜信子 , 2008,「＜解説＞果てしなく血を流し生まれかわり産みなおし書きつづける、旅」『森崎和江コレクション 精神史の旅 1 産土』藤原書店 :323-333 頁 .

松井理恵 , 2018,「植民地朝鮮とは何か：森崎和江『慶州は母の呼び声』をテキストとして」『理論と動態』11:91-111 頁 .

水溜真由美 ,2000,「サバルタンはいかに連帯することができるか:森崎和江『第三の性』試論」『情

況　第二期』11（5）情況出版:92-115 頁.
————, 2013,『「サークル村」と森崎和江：交流と連帯のヴィジョン』ナカニシヤ出版.
森崎和江 ,1961,『まっくら：女坑夫からの聞き書き』理論社.
————, 1965,『第三の性：はるかなるエロス』三一書房.
————, 1970,『闘いとエロス』三一書房.
————, 1976,『からゆきさん』朝日新聞社.
————, 1984,『慶州は母の呼び声：わが原郷』新潮社.
————, 2008a,『森崎和江コレクション 精神史の旅 1 産土』藤原書店.
————, 2008b,『森崎和江コレクション 精神史の旅 2 地熱』藤原書店.
————, 2009a,『森崎和江コレクション 精神史の旅 3 海峡』藤原書店.
————, 2009b,『森崎和江コレクション 精神史の旅 5 回帰』藤原書店.
————, 2011,「『無名』の人びとが紡ぎ出す歴史の諸相：『アジア』に近接する『聞き書き』という方法」和田春樹ほか編『岩波講座 東アジア近現代通史 別巻 アジア研究の来歴と展望』岩波書店:13-24 頁.
————, 2014,『いのちの自然:十年百年の個体から千年のサイクルへ』アーツアンドクラフツ.
————, 2015,『森崎和江 詩集』思潮社.
————, 2016,『からゆきさん：異国に売られた少女たち』朝日新聞出版.
————, 2017,『第三の性：はるかなるエロス』河出書房新社.
森崎和江・中島岳志 , 2011,『日本断層論：社会の矛盾を生きるために』NHK 出版.
佐藤泉 , 2009,「いかんともしがたい植民地の経験：森崎和江の日本語」青山学院大学文学部日本文学科編『異郷の日本語』社会評論社:65-97 頁.
————, 2018,「森崎和江の言語論」『現代詩手帖』61（9）:68-73 頁.
嶽本新奈 , 2015,『「からゆきさん」：海外＜出稼ぎ＞女性の近代』共栄書房.
上野千鶴子 ,2013,「産の思想と男の一代主義：森崎和江『第三の性』－はるかなるエロス」『＜おんな＞の思想：私たちは、あなたを忘れない』集英社:11-35 頁.
————, 2015a,「複合差別論」『差異の政治学 新版』岩波書店:357-395 頁.
————, 2015b,「自著解題」『差異の政治学 新版』岩波書店:489-504 頁.

（まつい・りえ　跡見学園女子大学）